村瀬論文「こころの老化としての「分裂病」」に寄せて

木村　敏

村瀬氏はその著書『歴史としての生命――自己・非自己循環理論の構築[1]――』で、同氏のいう「自己・非自己循環理論」を主として生命論の観点から展開したが、本論はさらにそれを「こころの世界」にも適用し、それを「自然の世界と同じように科学的に探究」する糸口として、「分裂病の理解」について論じたものである。同氏によれば、両方の世界に共通する基本原理として、「内」と「外」の「相補性」ないし「対立的共存」が取り出せるという。この指摘は、分裂病を内なる自己と外なる他者の「あいだ」にかかわる病理として構想してきた私にとっても大きな示唆を与えるものである。

分裂病研究の約一世紀の歴史において、最初は――たとえば「分裂病」の命名者であるブロイラー[2]にも見られるように――脳を含む身体の病理の自然科学的研究と精神の病理としての心理学的研究がまだ截然と分離していなかった。それが今次世界大戦以後、特に向精神薬が開発されて以来は、分裂病を代表とする精神病で「障害」される「こころ」とは脳の物質的な変化の表現に過ぎず、認知科学的な方法論で客観的に探究し尽くしうるものとみなされるようになっている。この圧倒的な物質科学的・客観主義的な潮流に逆らって、こころ独自の主観性／主体性を主張しようとしているのが、現象学的あるいは人間学的と呼ばれる精神病理学の流れであることはいうまでもない。

こころの主観性はなによりもまず、自分のこころを自分自身で経験している人が、自分は自分であるという自

己の自己性を感じとっていることに現れている。そのかぎりにおいて主観性と自己性は同義とみなして差し支えない。しかし自己が自己であるためには、自己は非自己に出会わなくてはならない。「自己」という属性を帯びた実体があらかじめ存在して、それが「非自己」という属性を帯びた別個の実体（他者）と出会うのではない。自己が自己となり非自己が非自己となるのは、あくまでこの出会いを通じてのことである。出会いはそのつど生起する出来事であるから、自己と非自己の成立もそのつど繰り返し反復する「一回的な歴史性」（村瀬）以外のなにものでもない。

人間の場合、非自己とはとりわけ同種他個体である他人を指している。しかしこれも自分自身の主観的経験からわかるように、私が他人と出会ったとき、そこにいつも非自己が成立するとは限らない。親密な母子関係や恋人同士の場合のように二人が拡大した単一の「自己」を形成して、それ以外の他人たちを「非自己」とみなす場合もある。この「拡大した自己」の範囲は状況に応じてもっと多数の個体を含みうるし（家族、友人グループなど）、さらに民族や国家から人類全体、ときには人間以外の生物にまで拡大することもあるだろう[3]。自己の主観性を「一人称的」と形容するなら、自己は単数一人称から複数一人称へと拡大しうる。（これに対して非自己は、それが非自己であるかぎり、つねに単数あるいは複数の三人称的存在として経験される。）

実はこの「拡大した自己」という表現は正確ではない。系統発生的に見ても個体発生的に見ても、他個体との複数一人称的な共存の方が単一個体の自己意識より「古い」からである。自己が自己自身を単数一人称的に意識するのは、この集合的な共存状態からの個別化 individuation（村瀬氏はユング派の慣例にしたがってこれを「個性化」と表記しているが、私はこれを採らない）の所産であって、系統発生的にはヒトにおいて、個体発生的には思春期に達して、はじめて純粋に成就しうるものと思われる。しかし、たとえば群れを作って集団行動をしている渡り鳥などを観察してわかるように、個々の個体の行動（栄養、生殖など）はすでにある程度集団全体の行動から独立して営まれている。行動面での個別化は「自己意識」の個別化よりはるかに古い。

思春期を通過した人は、自己を単数の自己としてはじめて純粋に意識しうる。しかしこの単数自己意識の根底には、系統／個体発生的にそれ以前の複数集合的なあり方とそれについての意識が、つねに残存している。他人と出会ったとき、まず触発されるのはこの複数一人称的な層であって、単数的自己意識はそこからの「個別化」を絶えず新たに繰り返さなくては確保できない。自己は他人と出会ったとき、それを自己の根底である「内」へ取り込んで、これと「われわれ」のかたちで「共存」するか、それを「外」なる「非自己」とみなしてこれと「対立」するかの、いずれかのありかたを「選択」することになる。このことは、特殊人間的な「自己意識」を度外視して行動面にかぎるなら、細胞レベルまで含めたあらゆる生物についていえる。この選択も、あくまでそのつどの出会いを通じての「一回的」な出来事である。

思春期以後の人間の場合、自己意識は表面的には完全に個別化・単数化しているが、その根底にはつねに「原始的」な自他未分離の複数一人称的な層が隠れている。もしその人が自分の単数的自己を「自己」として意識するなら、この原始的な未分離の層は、自己の外なる「非自己」だということになるだろう。逆にその人が、たとえば禅の見性におけるように、この「父母未生以前」（この表現は文字通り理解すべきである）の自己の根底に本来の内面的な自己を見出したなら、通常の自己意識が捉えている個別態の方が非本来的で外面的な「非自己」として意識されることになるだろう。

分裂病の基本障害が、この名称の提唱者であるブロイラーの考えていたような「精神の分裂」にあるのではなく、自己が自立した自己でありうるための「個別化の原理」の障害であることは、私がすでに以前から述べてきたとおりである[4]。分裂病者が他人との出会いに際して、自己を自己として、「内」を「内」として確保することができず、外部であるはずの他人が突然テレパシーのようなかたちで自分の内面に姿を現したり、自分の内面が外部の他人につつぬけになったりするという特異な症状を示すこと、周囲の他人との自然な意思疏通が不可能となって社会生活から急激に脱落し、結局は自分だけの世界に「内閉」してしまうことなどをはじめ、分裂病が個別化

の病態であることを示唆する事実は多い。なによりも注目しなくてはならないのは、分裂病が自己と他者との（いわば水平的な）あいだの病態であるばかりでなく、自己自身の内部における個別的・表層意識的な自己と集団的・深層意識的な自己との（いわば垂直的な）あいだの病態でもあるということである。この「水平的なあいだ」と「垂直的なあいだ」は、厳密な意味で同じ一つの「あいだ」が示す二つのアスペクトとみなさなくてはならない。

生命一般の世界で自己と非自己が互いに相補的な「循環過程」（ヴァイツゼッカー[5]の言葉を借りれば相互隠蔽的な「ゲシュタルトクライス」ということになるだろう）に入るのは、村瀬氏も示唆しているようにとりわけ生殖の過程においてだろう。人間的自己意識の個別化をめぐる問題が生殖開始年齢である思春期に先鋭化し、他ならぬこの時期が分裂病の発症年齢に一致するのは、けっして偶然ではない。分裂病とは、まさに村瀬氏のいう「自己・非自己循環過程」そのものが、ヒトの自己意識という最高度に個別化した「こころ」を舞台にして展開する病態にほかならない。

最後に村瀬氏も言及している量子力学的な相補性とのアナロジーについて、きわめて思弁的なコメントを加えておきたい。コペンハーゲン解釈のいう相補性とは、素粒子が場の振動としての波動であり、かつ個別の実在としての粒子でもあるという「矛盾的自己同一」のことだった。そしてそこでは、これも村瀬氏の触れている「観測のジレンマ」が発生し、観測行為それ自身が相補性の一方のみを現出させる。それと同じことが「自己」についても言えるのではないか。自己は、その一面として他人あるいは宇宙全体と「共振」（中村雄二郎）する場所としての集合態であると同時に、他の一面では「単独者」（柄谷行人）として「粒子状」の個別態でもある。そのどちらが前景に立つかは、それを見る見方次第で変わるだろう。分裂病とは、この「観測のジレンマ」が統合困難になって、相補性が解体した病態とも見うるのかもしれない。

（1）村瀬雅俊『歴史としての生命――自己・非自己循環理論の構築――』京都大学学術出版会、二〇〇〇年。

(2) E. Bleuler: Dementia praecox oder Gruppe der Schizophrenien. In: G. Aschaffenburg: Handbuch der Psychiatrie, Spezieller Teil, 4. Abteilung, 1. Hälfte, Deuticke, Leibzig/ Wien 1911（飯田・下坂・保崎・安永訳『早発性痴呆または精神分裂病群』医学書院、一九七四年）。

(3) この点については、木村敏『心の病理を考える』（岩波新書、一九九四年）の一七〇頁以下を参照してほしい。

(4) 木村敏『分裂病の現象学』（弘文堂、一九七五年）所収の「精神分裂病症状の背後にあるもの」（一九六五年）、最近では木村敏『分裂病の詩と真実』（河合文化教育研究所、一九九八年）所収の「自己と他者」（一九九五年）を参照。

(5) ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』木村敏・濱中淑彦訳、みすず書房、一九七五年。